



アメリカ向けボイラ給水ポンプ

03

エネルギーの未来を創る トリシマのポンプ技術

— AI時代の電力需要拡大と
グローバルな脱炭素化への挑戦

Project Highlights

09

14



トリポンスクール開催

07

ユーザー訪問記 215

ユーティリティ設備の 予知保全を強化 簡易振動診断の工数削減へ

大同特殊鋼株式会社



15

新日本造機株式会社と共に
エネルギー・産業機械分野の
「Global Top Player」へ

「想い」こそが 我々の原動力です

CEO 原田耕太郎

CEO MESSAGE

皆さん、新年あけましておめでとうございます。年末年始の9連休、ご家族や大切な方々とリフレッシュできたことと思います。2026年の仕事始めにあたり、私たちが今年めざすべき方向性について、恒例となった大谷翔平選手の進化と重ね合わせながらお話しします。

— これまでの振り返り：進化の軌跡

新年の挨拶で大谷選手の話始めて今年で5年目になります。彼が絶えず進化し続けるように、私たちトリシマも進化を続けてきました。2021年の「基本を大切にする」から始まり、2022年は「まだまだ上手くなれる」という向上心を持つこと、2023年はデータに基づき「変化を楽しむ」こと、そして2024年は「チームワーク」を学びました。これらはすべて、現在の私たちの成長の糧となっています。



— 2025年の教訓：

仲間が支える「真のチームワーク」

昨年、大谷選手は投手として復活し、ドジャースは見事にワールドシリーズ2連覇を果たしました。その栄光の裏には、私たちの胸を打つシーンがありました。ワールドシリーズ最終戦、先発した大谷選手が打たれ、負け投手になりかけた時、チームメイトは「彼を負けさせない」という一心で奮起し、逆転勝利を収めたのです。これは仕事の本質にも通じることです。誰かが壁に突き当たった時、精神的・肉体的に辛い時、仲間がそれを支え、共に乗り越え成長していく。それこそが私たちがめざす「真のチームワーク」の姿です。



— 2026年の3つのキーワード

1. “想い”を大切にす

大谷選手が誰よりも「速い球を投げたい」「遠くへ飛ばしたい」と願うように、私たちが「世界一のポンプを造りたい」「お客様に喜びを届けたい」という純粹で強い「想い」を持ってください。ポンプは人々の生活に不可欠なものです。困難に直面した時こそ、この原点である「想い」に立ち返りましょう。

2. チームワーク

先ほど触れたように、仕事は一人ではできません。チームで助け合い、チームとして最高のポンプを届けるために何ができるかを常に考え、行動してください。

3. 楽しむ

目標達成や納期管理など、仕事には苦しい局面が多々あります。しかし、その根底には「楽しむ」気持ちが必要です。良いものを作ってお客様が

喜ぶ姿や新しい製造方法、効果的な営業手法を発見した時の喜びなど、プロセスそのものを楽しみ、苦しさの先にある成長と達成感を分かち合いましょう。

— 4つ目のキーワード：

世界No.1のポンプ企業

今年はまだ一つ、4つ目のキーワードを掲げます。それは、山本由伸投手がポストシーズンで発し、後にチームのスローガンとなった“Losing is not an option”（負けるという選択肢はない）という言葉から学びを得た「世界No.1のポンプ企業」です。私たちトリシマも常に“No. 2 is not an option”（2番という選択肢はない）という強い気概を持ち、No.1をめざします。

現在、私たちは日本国内において確固たる地位を築きつつありますが、決して現状に満足してはいけません。エネルギー効率の追求、新エネルギーへの対応、そして圧倒的なコスト競争力。あらゆる面において「他社が追随できないレベル」を自問自答し、世界No.1のポンプ企業へと上り詰めましょう。

これからの時代、地球温暖化対策や新しいエネルギーインフラにおいて、私たちのポンプが必ず求められます。頂点への道のりは険しいかもしれませんが、勝つこと、そして成長することは大きな喜びです。その挑戦の先には、社員の皆さんとご家族が、より豊かに未来を楽しめる日々が必ず待っています。

2026年、私たちを支えてくださるお客様への感謝を胸に、さらなる飛躍の1年を共に楽しみながら駆け抜けましょう。

(2026年1月5日初出式にて)



エネルギーの未来を創る、トリシマ

— AI時代の電力需要拡大と、グローバルな脱炭素化への挑戦

1 世界共通の課題：電力需要増と脱炭素

いま、世界はかつてないほどの電力需要の拡大に直面しています。その最大の牽引役は、AI（人工知能）の急速な普及と、それを支えるデータセンターの爆発的な増加です。特にAI開発をリードするアメリカには、既に5,500を超えるデータセンターが稼働しており、さらに数千の施設が建設・計画されています。こうした背景から、アメリカの電力需要は2030年までに25%、2050年までに78%増加するという予測もあります。*

※出典：ICF International Inc.

一方、カーボンニュートラルの実現に向け、世界各地で太陽光や風力などの再生可能エネルギーの導入が進んでいます。しかし、これらの再エネは天候に左右されるため、常に安定した供給ができるわけではありません。電力を安定して供給するためには、天候に左右されない安定電源によるバックアップが不可欠です。電力需要の急増に応えつつ、再エネの不安定さを補い、かつ脱炭素化を両立させる。この難題の解決策として、日米両国で高効率な火力発電プラントの刷新と活用が急ピッチで進んでいます。



2 日本の戦略：「長期脱炭素電源オークション」が拓く道

日本国内では、原子力発電所の停止や老朽化した火力発電所の廃止により、電力の供給余力が減少しています。国はこの課題に対応し、将来の安定供給と脱炭素化を両立させるため、2023年度から「長期脱炭素電源オークション」を開始しました。これは、脱炭素電源への投資に対し、原則20年間にわたり固定費水準の容量収入を得ることができる仕組みです。

この制度の対象は幅広く、新規電源の建設だけでなく、老朽化した設備を最新鋭の低炭素設備へと丸ごと更新する「リプレース」や、既存の火力発電所をアンモニア混焼などができるように作り変える「改修」も含まれています。すでに実施されたオークションでは、最新鋭のLNG専焼火力への刷新案件をはじめとして続々と落札されています。**トリシマにおいても、関連するポンプの受注が相次いでいる状況です。**

のポンプ技術

▼ 主な落札電源一覧

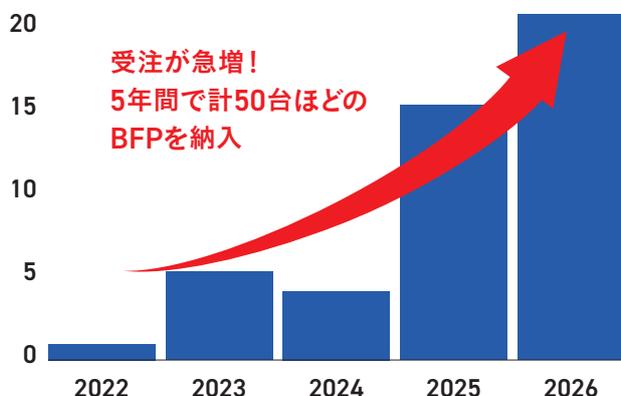
落札回	事業者名	発電所名・号機	電源種
第1回	中国電力	柳井発電所新2号機	LNG専焼火力
	東京瓦斯	千葉袖ヶ浦パワーステーション	
	大阪瓦斯	姫路天然ガス発電所3号	
	北海道電力	石狩湾新港発電所2号機	
	東北電力	東新潟火力発電所6号機	
	関西電力	南港発電所1/2/3号機	
	JERA	知多火力発電所7/8号機	既設火力の改修(アンモニア混焼への改修)
	北海道電力	苫東厚真発電所4号機	
	コベルコパワー神戸	神戸発電所1/2号機	
	エクイスバイオエネルギー・ジャパン	苫東バイオマスパワーステーション	
石狩湾新港バイオマス発電	石狩湾新港バイオマス発電所	バイオマス	
第2回	北海道電力	石狩湾新港発電所3号機	LNG専焼火力
	四国電力	坂出發電所5号機	
	ゼロワットパワー	ゼロワットパワー市原発電所	
	四国電力	西条発電所1号機	既設火力の改修(アンモニア混焼への改修)

3 米国市場の加速：AI需要に応える劇的な供給増

米国市場においても、トリシマは25年以上前から1,000台以上のポンプを納入してきた確かな実績を誇ります。特に近年のAI需要の加速により、米国では再エネの変動に合わせ、起動・停止が容易な最新鋭のガスコンバインドサイクル(GTCC)発電所の建設が旺盛です。

トリシマではその中枢と言えるボイラ給水ポンプ(BFP)の納入台数が、2022年からの5年間で約50台に迫る勢いで推移しています。2026年には、2023年比で約400%という劇的な増加を見込んでいます。一方、要求される仕様も年々厳しくなっており、「高効率」「大流量化」「低締切圧」をすべて満たすことが必要になってきています。

▼ 米国でのトリシマ製BFPの納入台数

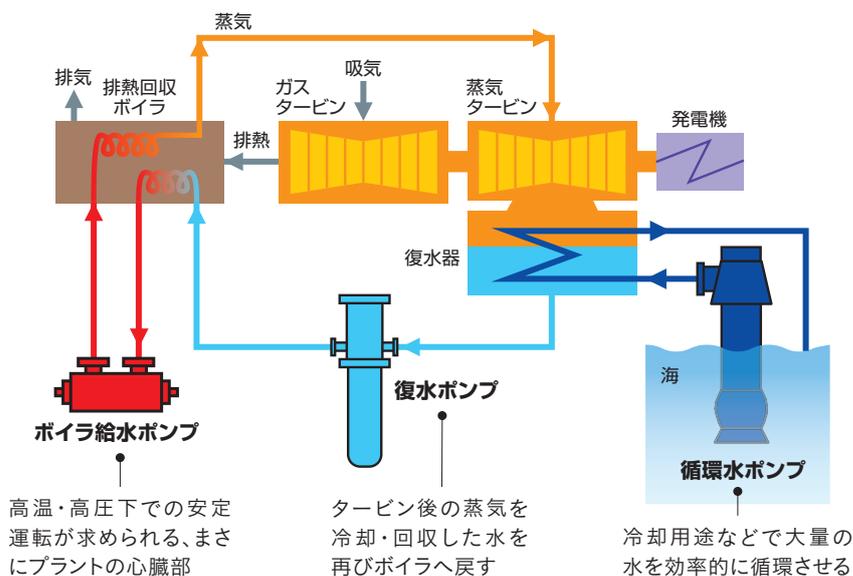


アメリカ南部に2025年に納入されたBFP(工場出荷時撮影)
(ポンプ形式:MHG、原動機容量:9MW)

4 発電所の心臓部を支える：トリシマのポンプラインナップ

発電プラントにおいて、ポンプは「一瞬の停止も許されない」極めて重要な役割を担っています。トリシマは、発電プラントに必要なすべての主要ポンプを製造できる、世界でも数少ないメーカーであり、システム全体の最適化を実現できます。また創業106年の歴史に裏打ちされた技術力で、年々厳しくなる高度なニーズにも応えています。

▼ コンバインドサイクル発電



5 次世代燃料への挑戦：水素とアンモニアの未来へ

脱炭素化の歩みは、現在のLNG火力にとどまりません。2050年のカーボンニュートラル実現に向け、燃料を段階的に水素やアンモニアへとシフトさせる挑戦が始まっています。

■ アンモニア混焼への挑戦

既存の石炭火力発電を活かすアンモニア混焼において、毒性の強い燃料を安全に扱う「サブマージド型インタンクポンプ」を開発。2025年2月にはアンモニア実液を用いた運転試験を実施し、ポンプの健全性を確認しました。



インドネシア子会社でのアンモニア実液を用いたポンプ運転試験

■ 水素社会の実現に向けた取り組み

水素社会の実現に向け、トリシマはマイナス253℃の液化水素を扱う「液化水素ポンプ」を開発しました。2025年12月には、世界初となる商用規模の液化水素実証ターミナル向けに受注することができました。

(本号11ページに掲載)



世界初! 産業機械に
超電導モータ採用
運転時の発熱を抑制

遠心ポンプとして
世界最大の
流量・昇圧量を達成

JAXA能代ロケット実験場

-253℃の液化水素を用いた運転試験(2024年3月)

ポンプで世界を動かし、持続可能な未来を創る

電力需要の増大と脱炭素化の加速。この二律背反に見える課題に対し、トリシマは確かな技術力で応えます。日本での確固たる実績と、米国市場での爆発的な成長、そして世界をリードするポンプ技術。「私たちはポンプを愛し、世界によりよい変化を生み出すために、進化し続けます」という理念のもと、持続的な企業価値の向上と、クリーンで安定したエネルギー社会の実現に邁進します。

ユーティリティ設備の予知保全を強化 簡易振動診断の工数削減へ

大同特殊鋼株式会社



大同特殊鋼株式会社は、特殊鋼の製造・販売を中心とした総合素材メーカーです。自動車、産業機械、エネルギー、インフラなど、さまざまな分野に鋼材や素材を供給しています。鋼材の製造から機械加工までを一貫して行う体制を強めとし、国内外の製造業を支えています。なかでも知多工場は電気炉を備え、厚板や丸棒など多様な鋼材を生産する重要な拠点です。今回はこの知多工場の設備センターでお話を伺いました。

ユーティリティ設備の異常を 早期発見する体制作りへ

Q: TR-COM導入前、貴社ではどのような課題を抱えていましたか。

知多工場では重要設備の一部にオンライン診断を導入していましたが、ユーティリティ設備は月に1回の簡易測定のみでした。異常の兆候をとらえるにはデータが少なく、必要性は感じていたものの、導入フローの負担を考えるとなかなか踏み切れない状況でした。

従来はアラーム機能のない振動測定機を使用していたので、月1回の測定をして、事務所に戻ってデータをソフトに入力し、そこで初めて異常に気づくという流れでした。データ点数があまりに少なく、異常値が出ても背景がわからないことが多かったですね。

現場で使いやすい 監視システムを求めて

Q: 振動監視システムを検討する際、特に重視した点はどこにありましたか？



大同特殊鋼株式会社

最重視したのは維持管理の負担が少ないことです。保全員は現場作業が多く、データ確認に時間をかけられません。現場でも事務所でも状態を把握できる仕組みが必要でした。

TR-COMを採用した一番の決め手は、Bluetooth通信で点検とデータ取得が一度に行える点です。保全員が現場を確認しながらデータが取れるので実運用にマッチしていました。システムがシンプルで導入コストも抑えられ、標準機能も十分揃っており、総合的に最適と判断しました。

導入時のサポート体制が スムーズな立ち上がりを後押し

Q: TR-COM導入時や導入後のサポートについて、印象をお聞かせください。

導入前からWEBマニュアルがしっかり用意されている点に驚きました。低コストなシステムながらマニュアルや動画が非常に丁寧で、「ここまで整っているのか」というのが最初の印象です。

導入時には、管理者側ではWEBマニュアルを活用し、現場のメンバーには紙で印刷したものを渡して使い方を覚えてもらいました。操作自体がシンプルなので、習熟に時間がかからなかったことも良かったですね。

故障を未然に防ぎ 点検工数も大幅削減へ

Q: TR-COMを導入して、現場の点検作業にはどのような変化がありましたか？

まず大きく変わったのは、月1回の簡易振動診断にかかる工数です。従来は、診断機をパソコンにつないで点検ルートを読み込み、それを持って現地へ行き、測定し、また事務所へ戻ってパソコンに落とすという手順を毎回行う必要がありました。この一連の作業にかなりの時間を取られていたのですが、TR-COMの導入によってこうした作業の80%以上を削減することができました。

さらに、データ点数も大幅に増えました。以前は月1点のデータしか取れなかったものが、今では1時間に1点データが蓄積されます。データ量が増えたことで、異常の傾向がつかみやすくなり、状態を高い精度で把握できるようになりました。

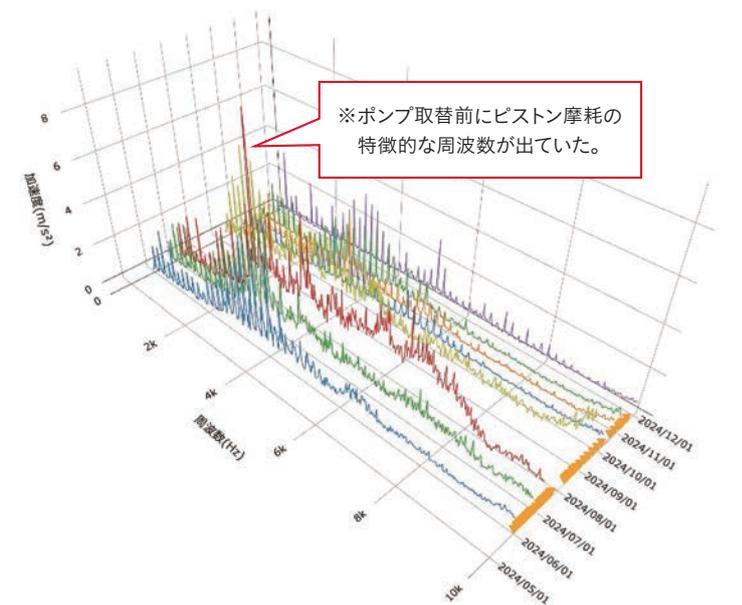
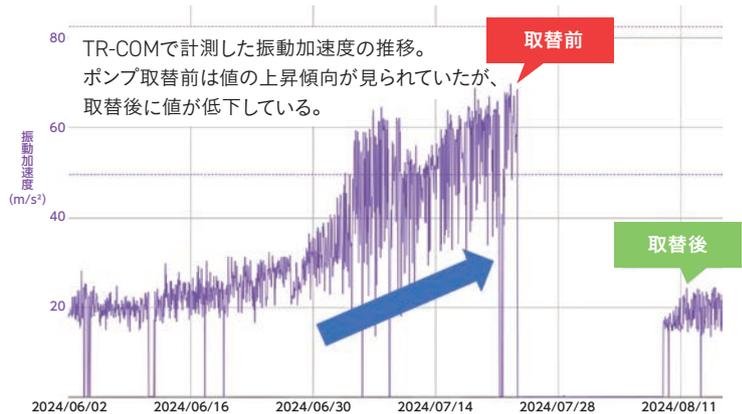
Q: 安全性の面でも変化はありましたか？

はい。TR-COMを導入したことで、危険作業が減ったのは大きな成果だと思っています。従来の測定では回転物に近づかなければならない場面がありましたが、TR-COMは常設センサーが自動でデータを取ってくれるので、回転物への接近や高所作業の必要が大幅に減り、安全性向上にもつながっています。

Q: 設備の異常検知において、TR-COMはどのように役立ちましたか？

特に効果が大きかったのは、油圧ポンプで発生した事例です。TR-COMからFFT急変通知が発報されたため、現場を確認したところ、異常の初期段階であることがわかりました。当初は通知に半信半疑でしたが、実際に点検すると確かに異常が確認され、故障に至る前に対応することができました。

この油圧ポンプは過去に約2年周期で故障が起きていました。故障するとラインを緊急停止しなければならず、生産に大きな影響を与えます。しかしTR-COMを設置してしばらくすると振動加速度の上昇を確認、FFTでも潤滑不良やピストン摩耗の特徴を検知しました(※右図)。これを受けて機械を停止・分解してみたところ、TR-COMで検知した通りピストンで潤滑不良が発生していることが確認できました。その結果、油の



正常度の管理方法を改善するにいたり、予知保全の仕組みを整えることができました。

Q: 寿命やメンテナンス周期にも変化はありましたか？

はい。これまでは2年周期でポンプを更新していましたが、TR-COM導入後は機械の実際の状態に合わせて点検・交換の判断ができるようになりました。TR-COMで状態を把握できるようになったことで、突発停止のリスクが大幅に下がり、計画的なメンテナンスにつなげられるようになった点は非常に大きいです。今後も、現場のニーズに沿ってTR-COMを拡大していきたいですね。

— このたび取材にご協力いただいた関係者の皆様に誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

(取材/スマートメンテナンス推進部 柏原 遥花)

Project Highlights

01 半世紀の役割を未来へつなぐ排水設備更新

高槻市 今戸排水機場向け耐水モーター一体型立軸斜流ポンプを受注

大阪府高槻市の南東部に位置する今戸地区は、淀川沿いの低地という地形的特性から、古くより浸水被害に悩まされてきた地域です。そこでこの地区の安全を支える設備として、昭和30年代に「今戸排水機場」が建設されました。当時、横軸斜流ポンプ2台を備えて稼働を開始した同機場は、およそ半世紀にわたり、地域の浸水被害軽減に寄与してきました。

しかし、建設から50年以上が経過した現在では、設備の老朽化が深刻な問題となっていました。また、近年の気候変動に伴う集中豪雨の激甚化を背景に、より高い信頼性と確実な排水機能の確保も求められていました。

こうした課題に応える技術として、トリシマは、万一の浸水時にも運転継続が可能な「耐水モーター一体型立軸斜流ポンプ」を提案し、今回の採用に至りました。本技術の最大の特長は、機場が浸水した場合でも水密化され

たポンプとモーターが運転を継続できるようになっており、非常時における排水機能の確保と早期復旧に大きく貢献することです。

現在は、2027年5月の竣工をめざし、ポンプの設計・製作ならびに施工計画の立案を進めています。本設備更新により、排水機場全体の信頼性と機能性が一層向上し、地域住民の安心・安全な暮らしを将来にわたり支えることが期待されています。

ポンプ名称	1, 2号 主ポンプ
口径・形式	SPV700-SM
台数	2台
原動機容量	150 kW

02 既設設備を活かし、排水機能を次の世代へ

山梨県 大塚排水機場向け排水設備改修工事を受注

温泉総選挙「絶景部門」第1位に選ばれた「みたまの湯」で知られる山梨県市川三郷町にある大塚排水機場は、45年以上にわたり地域住民の生命や農地を守る重要な役割を担ってきました。

口径900mmの排水ポンプ（横軸斜流ポンプ）2台が設置されている本機場は、豪雨などによる湛水被害の防止を目的として1979年に建設されました。しかし、長期間の運用に伴う設備の老朽化により、将来的な排水機能の低下が懸念されていました。これに加え、近年の気候変動や受益地の状況変化を踏まえた湛水解析の結果、現在

の環境に即した排水能力の増強が必要となっていました。

こうした課題に対し、本工事では設計検討の段階から、360°カメラや内視鏡を用いたポンプ内部の健全度調査を実施。その結果、ポンプ本体は健全な状態を維持していることが確認され、全面更新やコンクリート基礎の再構築を行うことなく、部分更新および分解整備により、コストを抑えつつ継続使用が可能であると評価されました。さらに、回転体の更新に合わせて回転速度を向上させることで、要求されていた「吐出し量増加」も実現できることを確認しています。

また、ポンプの無水化による維持管理性の向上と点検作業の省力化を目的として、従来のグランドパッキン方式からメカニカルシール方式への改造も行います。

本工事では、ポンプ本体に加え、ディーゼルエンジンや減速機、補機設備、電気設備などの更新も実施しますが、既設設備を運用しながらの施工となるため、降雨時には即座に排水機能を発揮できるよう、工程調整および

ポンプ名称	排水ポンプ
口径・形式	SP900
台数	1台
原動機容量	86 kW

安全確保に細心の注意を払い、慎重に工事を進めてまいります。



長年にわたり排水を続けてきた既設ポンプ

03

半世紀を支えた造船ドック用排水ポンプ、次世代仕様へ進化

名村造船所 伊万里事業所向け主排水ポンプの更新受注

株式会社名村造船所は、1911年の創業以来、船舶や橋梁の製造を手がけてきた造船会社です。日本の造船業界は、1960年代後半から続いた大型タンカー需要を背景に、長年にわたり高い世界シェアを維持してきました。

こうした時代背景のもと、船舶の大型化に対応するため、同社では1974年に伊万里事業所を新設しました。その際、造船ドックの排水設備として採用されたのが、トリシマ製の立軸斜流ポンプです。

ドック排水ポンプは、船舶の建造や修繕を行ううえで不可欠な基幹設備であり、ドック内の海水を短時間で排出することで、作業工程の安全性と効率性を支えています。伊万里事業所に納入された主排水ポンプは、事業所新設以来、約50年にわたり安定した操業を支え続けてきました。

今回の更新は、こうした長年の運用を踏まえた老朽化対応に加え、保守負担の軽減といった現在のニーズにも応えるものです。当時主流であった、電動機とポンプの間に減速機を介した構成から、減速機を廃した機器直結方式を提案しました。機器構成をシンプルにすることで、

保全作業の省力化やランニングコストの低減が期待されます。

最新技術への更新は、設備性能の向上だけでなく、現場の働き方や操業の安定性にも寄与します。トリシマは今後も、お客様に寄り添いながら、設備のライフサイクル全体を見据えた最適な提案を行ってまいります。



ポンプ名称	No.1 主排水ポンプ
口径・形式	SPV1350
台数	1台
原動機容量	470 kW

04

液化水素サプライチェーン商用化実証の主要施設となる 液化水素基地向けに「大流量液化水素ポンプ」を受注

「商用規模の液化水素実証ターミナル」の心臓部として採用

川崎重工業株式会社（以下：川崎重工）より、同社が建設を進める、国の助成事業を活用した官民連携による世界最大級の液化水素基地「川崎LH₂ターミナル」向けに、大流量液化水素ポンプを受注しました。

「川崎LH₂ターミナル」は、日本水素エネルギー株式会社（JSE）が事業主体となり、川崎重工を代表企業とする共同企業体が主要コントラクターとして設備の設計・建設を進めています。本ターミナルは、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）が推進する「グリーンイノベーション基金事業」に採択された「液化水素サプライチェーンの商用化実証」における重要な設備であり、世界最大級となる液化水素貯蔵タンク（貯蔵容量5万m³）をはじめ、海上荷役設備（出荷・受入両機能を含む）、水素液化設備、水素送ガス設備、液化水素ローリー出荷設備などを備えた、世界初となる商用規模の液化水素施設です。

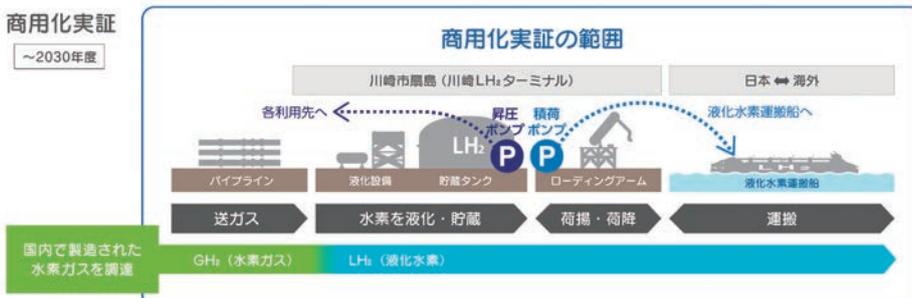
今回トリシマが受注したポンプは「昇圧ポンプ」および

「積荷ポンプ」です。これらのポンプには、トリシマが2024年に運転試験に成功した「超電導モータ搭載型液化水素ポンプ」が採用されます。そのスペック（下表）の実現は、世界の水素産業界にとって遠心ポンプ実用化への扉を開く画期的な一歩であり、トリシマにとっても歴史的な役割を担うものです。

トリシマの液化水素ポンプは、長年にわたり培ってきた高温・高圧多段ポンプの技術と、京都大学が研究開発してきた高温超電導技術を融合したものです。マイナス253℃という極低温環境下で電気抵抗がゼロとなる「超電導モータ」を搭載した液化水素ポンプを産業用途として実装するのは世界初となります。モータ自体の発熱を極限まで抑えることで、液化水素への熱侵入を最小限に抑制し、蒸発ロスを大幅に低減することができます。その結果、貴重な水素を気化させることなく効率的かつ大量での輸送が可能となり、商用サプライチェーンの構築に求められる「安価で大量の水素輸送」の実現に貢献します。

トリシマは、脱炭素社会の実現に向けたエネルギー課題への取り組みとして、今後もより大流量・高圧かつ高効率な液化水素ポンプの技術開発を推し進めることはもちろん、本事業を通じて大規模水素サプライチェーンの構築に貢献し、「社会に欠かせない企業」をめざします。

ポンプ名称	液化水素昇圧ポンプ	液化水素積荷ポンプ
用途	貯蔵タンクから各利用先へ液化水素を送り出す役割を担い、安定した供給を支えます。	液化水素運搬船への大量移送を担うポンプ（大規模荷役の要）で、スムーズかつ迅速な積み入れを実現します。
台数	5台	1台
流量	～51.8 m ³ /h	700 m ³ /h
全揚程	～2,400 m	510 m
回転速度	～5,300 min ⁻¹	3,350 min ⁻¹
モータ容量	50 kW	105 kW



画像出典：
日本水素エネルギー株式会社
WEBサイト掲載画像
(<https://www.japansuisoenergy.com/>)

※（株）西島製作所にて、
●マーク、昇圧ポンプ、積荷ポンプ、各利用先へ、液化水素運搬船への文言、点線矢印を追記

05

ブルネイの電力インフラ強化に貢献する 発電所用ポンプを受注

Berakas Power Plant (120MW CCGT) 向け高圧ボイラ給水ポンプおよび復水抽出ポンプ

ブルネイ・ダルサラーム国（以下、ブルネイ）に建設された出力120MWのコンバインド・サイクル・ガスタービン（CCGT）発電所は、ブルネイ国際空港から約7kmの場所に位置し、ブルネイ政府系企業であるDarussalam Assets Sdn. Bhd.の100%子会社、Berakas Power Company Sdn. Bhd.が運営しています。

本プロジェクトでは、シンガポールを拠点とする大手エンジニアリング・建設会社であるJurong Engineering Limitedが、設計・調達・建設を担当しています。

近年、ブルネイでは人口および国内総生産の増加に伴い、電力需要が拡大しています。こうした需要増加に対応するため、同国では新規コンバインド・サイクル・ガスタービン発電所の建設を含む電力開発計画（Power Development Plan：PDP）が策定されました。

今回受注した高圧ボイラ給水ポンプは、高圧の水を排熱回収ボイラへ供給し、蒸気を発生させることで蒸気ター

ビンを駆動する、発電プロセスにおいて極めて重要な機器です。ガスタービンの排熱を有効活用することで、さらなる電力を創出し、さまざまな負荷変動下においても安定的かつ高効率な発電を実現します。また、復水抽出ポンプは、復水器から復水を取り出し、脱気器およびボイラ給水ポンプへ送水する役割を担っており、ボイラ給水ポンプと同様に発電所の安定運転を支える重要機器です。

トリシマは、50年以上にわたり発電プラント向けポンプを提供してきたリーディングカンパニーとして、今後も世界各地の発電所における重要機器の供給を通じ、拡大し続ける電力需要への貢献をめざしてまいります。

ポンプ名称	HP Feed Water Pump	Condensate Extraction Pump
口径・形式	MHG 3/14	MML-E 125/10
台数	4台	3台
原動機容量	450 kW	90 kW

「止まらない社会」のために

— 国土強靱化貢献団体（レジリエンス認証）を取得

トリシマは、内閣官房国土強靱化推進室が制定したガイドラインに基づき、一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会より「国土強靱化貢献団体認証（レジリエンス認証）」を取得しました。レジリエンス（Resilience）とは、回復力や弾力を意味する言葉で、大規模な自然災害が起きても、組織としてダメージを最小限に抑え、素早く復旧して活動を続けられる体制を整えている団体を、内閣官房のガイドラインに基づき国が認証する制度です。

トリシマの「止まらない供給体制」と、いざという時の「迅速な行動力」—災害時でも自社の機能を維持し、ポンプの供給を止めないための準備、そして何より地域のインフラ復旧に即座に貢献できる体制であることが評価されました。日頃から現場

主導で訓練を行っているからこそ、有事の際も迷わず動ける。その「実践的な備え」が、地域社会を守る力（共助）として認められました。



自衛消防隊の訓練

トリシマが挑む「アジャイル革命」

未来を切り拓く新しい働き方

第3回

仕事を楽しむ力が「好循環」を生む。

今回は、昨年九州トリシマから大阪本社へ出向し、新天地で飛躍を続ける武富さんにお話を伺いました。

「なんで僕が？」からの大舞台

きっかけは「アジャイルX(クロス)カンファレンス-東京」への登壇依頼でした。当初予定されていた登壇者たちが多忙で参加が難しくなった際、「常に意欲を口にしている武富さんなら」と白羽の矢が立ったのです。

永和システムマネジメント社のアジャイルコーチの天野さんとの相談で決まったテーマは「若手育成」。武富さんが日々感じている「仕事楽しくて仕方ない」というリアルな経験を語ることになりました。

「アウェイ」を乗り越えた対話の力

当日は単身で東京の会場へ。周囲に知り合いがいない「アウェイ感」の中でのスタートでしたが、不思議と疎外感はなかったと言います。セッションは用意された内容に答えるだけでなく、ライブ感のある対談形式で進行。等身大



武富さん(左) グラレコ(中央イラスト) 天野さん(右) 手でクロスを表しています

の言葉で語られた内容は、グラフィックレコーディング(グラレコ)として鮮やかに記録されています。

仕事をしている時が、一番夢中になれる

印象的だったのは彼の独特な仕事観です。武富さんにとって、仕事は「最も熱中し、面白くなれる時間」。プライベートが「真っ白」に感じられるほど、開発やチームでの活動にエネルギーを注いでいます。九州トリシマでは一人での開発が多かった彼ですが、現在はスクラムチームの開発者として、チームで意見を出し合い目標を達成することに最大の喜びを感じています。「人と一緒に作る楽しさ」を知った彼の情熱は、周囲を巻き込む大きな力となっています。



広がる人脈、加速する好循環

カンファレンスでの交流を経て社外の人脈も大きく広がり、彼は今、「成果を出すことで新しいチャンスが舞い込み、さらなる成長に繋がる」という最高の「Positive Loop(好循環)」の中にいます。武富さんの挑戦は、まだまだ続きます。

聞き手：総務部 松本 葉子

教えて！
いーちゃん先生!!



「スクラムてなに？」

スクラムとは、アジャイル開発のフレームワークのひとつとして位置づけられるものです。ラグビーのスクラムのように、チーム全員が密に連携して目標へ突き進む開発手法です。大きな特徴は、計画から開発までを「1~4週間」の短い期間で繰り返し、成果をこまめに確認することと常に改善を意識して進めます。役職に関わらず意見を出し合う「フラットな関係性」を重視するため、武富さんのような若手も主体的に動けます。変化に柔軟で、お客様のフィードバックを即座に反映できる、現代に最適なチームの進め方です。

アジャイル開発に興味を持ったら、**井伊までご連絡を!** 社内・社外の多くの方から連絡をいただくと嬉しいです。

私が答えます



情報システム室
課長 井伊 秀樹

チーム名：COCONUT TEAM



トリポンスクール開催

トリシマでは、次世代を担う子どもたちの夢や希望を育む取り組みの一環として、2008年度より本社・工場近隣の小学校で出前授業を継続しています。子どもたちにもものづくりの楽しさや、やりがいを伝えることを目的に、去年は7月から12月にかけて、高槻市立阿武野小学校4年生4クラス(119名)を対象に、各部署から選ばれたメンバーが特別チームを結成し、3日間の授業を実施しました。

「ポンプの役割を知り、『なぜ?』を大切にしながら、ものづくりの楽しさを学ぼう」をテーマに、「ロープポンプ」を作り、実際に水を運ぶことで、その仕組みや便利さを実感する姿が多く見られました。楽しみながら学ぶなかで、子どもたちはものづくりの面白さを感じ、メンバーにとっても、次世代に技術や想いを伝える意義を改めて実感する機会となりました。



メンバーの感想

もりちゃん: 最年長としてチームをまとめ、最初は土台づくりを意識していましたが、次第にメンバーが自走。私は裏方として支える立場に。子どもに怪我なく授業を終えられたことが何よりの成果です。

しなちゃん: 入社1年未満で不安なスタートでしたが、気さくなメンバーに支えられ、部署を越えて自然と協力できました。大変な場面もありましたが、子どもたちの笑顔が大きな励みになりました。

おっちゃん: 聞いていた通りハードなスケジュールでしたが、メンバー同士で助け合いながら乗り切れました。最後は小学生と最高のメンバーと一緒に笑顔で終わられました。みんなで食べたたい焼きは一生の思い出です。

やまちゃん: 企画や準備に不安もありましたが、試行錯誤しながら楽しく活動できました。子どもたちがポンプの仕組みに気づいた瞬間が印象的で、私自身もこの活動を通じて「ものづくりの楽しさ」を改めて感じることができました。

いけちゃん: 最初は不安でいっぱいでしたが、活動を通して自信がつき、最後まで楽しく取り組みました。子どもたちの笑顔と、自分自身が以前よりも人前で意見を言えるようになったことが大きな収穫です。半年間ありがとうございました!

べっちゃん: 慣れない工作作業でしたが、怪我をさせないことを第一に考えて取り組みました。無事に最終日を迎えられることが何より嬉しかったです。部署を越えたつながりができたのが一番の収穫でした。

ほりちゃん: 事前に聞いていた通りハードな取り組みでしたが、部署の異なるメンバーそれぞれの強みを活かして助け合えました。小学生の無邪気な反応に元気をもらい、忙しいながらも楽しかったです。

りょんちゃん: 知り合いのいないチームで不安でしたが、次第に打ち解け、ひとつのチームになれたことで、部署の垣根を越えて気軽に相談できる人が増えました。また、自分たちの作ったもので生徒たちが笑顔になってくれたことが、過去一番の達成感につながりました。

さとちゃん: The Toripon Event is very memorable for me. I really got a new experience to share about the pump and my work with elementary students in Japan. One of the things I am most grateful for is that I have new friends who are united and always help and bring smiles in the Coconut team.

授業のスケジュール

1日目 トリシマとポンプについて知ろう

アクティビティ 人力で水を運んでどのくらい大変かを知る

授業 トリシマとポンプについて知ってもらう

2日目 ロープポンプを作ってみよう

アクティビティ ロープポンプを製作し水が出るか試してみる

3日目 作ったポンプで水を運ぼう

アクティビティ 作ったロープポンプを使って水を運び人力の時に比べてどのくらい早くなったか確かめる





新日本造機株式会社と共に エネルギー・産業機械分野の 「Global Top Player」へ

強固なパートナーシップにより、「社会に欠かせない企業」の実現を加速

2026年2月10日、株式会社西島製作所は、住友重機械工業株式会社より
「新日本造機株式会社（以下、新日本造機）」の株式100%を取得することを決議しました。

そして2026年7月1日、私たちはひとつのチームとして始動します。これは単なる事業規模の拡大に留まりません。

新日本造機が誇る卓越した技術力と、トリシマの強固なグローバル事業基盤を融合。
両社のシナジーを最大化させることで、長期ビジョン「社会に欠かせない企業」の実現を加速させ、
次の100年を勝ち抜く「Global Top Player」としての地位を確立していきます。

【新日本造機株式会社について】

設立	1973年11月1日
事業内容	蒸気タービン・プロセスポンプの製造・販売事業
資本金	2,408百万円
連結従業員数	508名(2025年12月末)
連結売上高	19,167百万円(2025年12月期)
連結営業利益	2,395百万円(2025年12月期)



蒸気タービン



プロセスポンプ

相互補完の製品ポートフォリオ

新日本造機が強みを持つ石油化学・エネルギー分野の蒸気タービンやプロセスポンプと、トリシマが得意とする上下水道・海水淡水化のポンプを掛けあわせることで、より幅広いソリューションをお客様に提供します。

技術 × グローバル網 の融合

新日本造機の卓越した技術力を、トリシマがグローバルに張り巡らせた営業・サービスネットワークに乗せて、世界市場へと迅速に展開します。

持続的な成長基盤の確立

新日本造機の盤石な収益基盤とトリシマの事業ノウハウが融合することで、未来への投資をさらに加速させます。

志を一つに。「世界のインフラを支え、動かす新たなステージへ」

新日本造機とトリシマが一つになることで、中期経営計画「Beyond 110」の先にある未来は、より確固たるものへと進化します。互いの強みを尊重し、切磋琢磨し続けることで、世界に驚きと価値を提供する挑戦を共に進めていきます。

